

---

# 灰色探偵

雲折 後晴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色探偵

### 【Nコード】

N5963B

### 【作者名】

雲折 後晴

### 【あらすじ】

メインは安楽椅子探偵モノ。助手（紛い）が動き探偵が話を聞いて事件をあつという間に解いてしまう。今回は学校を舞台とし、推理小説ではメジャーな密室殺人事件。学校で起こる密室殺人のトリックと犯人は・・・？こんな感じで。

## 生贄死贄（前書き）

あらずじどおりになれば良いなとただただ願うばかりです。明るい助手になんか知識がめちやくちや豊富そつな探偵。そんな連中が書きたくてこれを書いた次第です。  
楽しんでいただければ、うれしいですね。

## 生贖死贖

学校生活、トラブルがつき物である。

それはおそらく言うまでもない。いじめ、けんか、はたまたテスト。

原因理由様々だろう。しかしここであえて別に追求したいとは思わない。

ここで追求されるのは《事件》。ことの、くだんだ。

さてさて、今回追いつめるのは推理モノで有名な密室殺人。

かけるは学生、解くも学生。計画者に追求者。

これらの言葉に様々な語弊があるうと、一切関知しない、放っておく。

開始だ。

春。

早朝。

部活の早朝練習で女子生徒が一人、廊下を歩いていた。

桐生 朔きりゆう さくという。

バレー部員である。二年に入った途端、レギュラーへと昇進した。一年生の頃のまじめさが所以したのだろう。

一人廊下を歩いているのも職員室へ部室の鍵を取りに行くためだ。それというのもとある先輩が遅く来る所為だ。鍵をいつも持って帰

るくせに早朝練習に来るのは遅いというひどく矛盾した先輩だ。

そこまで上下関係がひどいわけではない。この学校、そういう古臭いものはないのだが、それにしても敬意がないわけではないので下手なことを言えたものではないのだ。それでこの繰り返しというわけだ。

「はぁ・・・」

まだ春とはいえ肌寒さが消えないわけではない。それが朝となれば尚更である。桐生は腕をさすった。

そして職員室を無駄なノックをした後入った。誰も居ない。

「何で？」

もう誰か教師が来ているはずだ。だから桐生はここに今、来ている。しかし教師が居ないのに職員室の鍵は開いている。

桐生はあたりを再度見回す。確かに誰も居ない。数分待っても誰も来ないということはつまり、ちよつと職員室を空けただけ、ということはないということだ。それにまさか学校というプライベートの塊がこういう類の甘さを発するはずがない。

とりあえず桐生は鍵を顧問の机から取っておく。そして印刷室、給湯室と探し始めた。しかしやはり誰も居ない。

残ったのは応接室と、さらにその奥の校長室のみ。

どちらも下手をすれば職員室より嚴重だ。それだというのに桐生がドアに手をかければたやすく応接室のドアは開いた。

不意に、桐生は足元に何か重いものが倒れ掛かった感覚がした。いきなりな出来事にすばやく後ろへ下がった。そしてその接触してきた『何か』を視認した。

「なっ!?!」

人。

否、人であったもの。

明らかに人体に付属していなかったはずのものが胸に存在した。

ナイフが深々と、人の胸へと突き刺さっていた。

桐生は息がひどく乱れ、男性から先ほどより離れるとその場に入り込んだ。

その乱れようは、泣きかけている子供のしゃくり具合と似ていた。

「ひっ、ひっ……イヤーーッ！」

近隣へとこの叫び声が聞こえたところで、桐生の意識は途絶えた。

## 安楽2

春。

季節はずれか、それとも季節にあっているのか桜も咲いている。しかしもう五月、とうに桜の開花前線は通り過ぎ、太平洋を優雅に通っているのではないかと思うころ。無論、海上に桜が咲くわけがない。

そんな桜が舞い散る中、一人颯爽と校門を徒歩で出て行く女子生徒が一人居た。

否、颯爽という言葉は少し語弊がある。なぜならその女子生徒、そんな風情はあろうと、いや風情が、風がありすぎるがため強風を必死に立ち向かっているのだ。

着ている制服は大きくはためき、スカートが危うくもある。決して彼女、太っているわけではないのだが服がはためくということは風の強さを物語っていると見えよう。

「な・・・んで！」そう女子生徒は毒づくも風が止むはずもない。風速十メートルをこえているのではないかというそんな中。

「何、が思い立ったが吉日よ！」

昔の格言を大声で切り捨てる。

不意に、名札が光る。光の加減の所為だろう。そのおかげで名札に刻まれている文字が注意が行く。

緑山。

大抵の山の形容になりそうな名前。

この緑山という少女、一人こんな昼間から学校を帰宅しているのには訳がある。別に仮病で早退したわけでもまた本当に病気でもない。先ほどの様子からもそれが鑑みることができる。

とある事情により早退扱いにならず帰宅できているのだ。無論授業も受けていることになる。

緑山という少女は疲れたのか校門から約百メートルで、建物の陰

に隠れた。よって、風の難を一時逃れることができる。そこで乱れた肩を少し過ぎたくらいの長い髪を緑山は直した。

「早く帰れるのは良いけどあの野郎のトコに行くのはなあ……。いやしかし……。あ〜」一度立ち止まったことで思考に拍車がかかったのか少女は一人様々なことを呟く。

「義務は果たさんと良くないけど……。行く度にあやつの皮肉を聞くのは嫌だし……。いやここは内申点のため!」

そう力強く叫ぶと少女は一目散にある場所へと向かう。

翌日、緑山が少々白い目で見られたことを補足しておく。

「……。着いたあ!」

とある少々古めかしいアパートを見て緑山は言う。肩で息をしているところ余程風が強かったか、走ってきたのか、と考えさせられる。

そしてこれ以上風に煽られなくなかったのだろう、足早にアパートの階段を上がってアパートの一室を前にする。その表札には「贅波」とある。

「あ〜っ〜」

緑山はここに来て迷う。

時間帯は真昼時。ちょうど今会社などでは昼休みも終了したころ。そんなとき、平日であるというのに人の家上がりこむという行為にいささか迷いが生じているのだろう。

そして意を決した。勢い良くチャイムを鳴らす。

住宅街をやけに音が響いた気がした。

「……………」

そして沈黙。

何の反応もない。

再度鳴らす。

先ほどより大きく鳴った気がした。

「……………」



まだ沈黙。

緑山の顔がだんだんと引きつる。

そして。

緑山は連続して、さらにそうしたところで音が大きくなるわけがないのだが強くチャイムを押す。

数回、十数回、そして数十回となるうとうとときにドアが大きく開け放たれた。

「やかましい！」

「ふっ……」緑山は不敵に、そして不適に笑う。無礼を行っておいてする笑顔ではなかった。

「……なんだ、あんたか。つくづく暇人だな。しかもこんな時間帯に。まったく、俺を引きこもりと呼ぶならその不良具合をどうにかしろつてもんだ。まあいい、さようなら」一度頭を大きく掻いた後ドアを開けた少年はドアを閉めようとする。

少年、乱れた髪をしておりシンプルなTシャツとズボンを着ていた。

一応着替えては居たのだろう。それにしても平日の昼間にまだ学生という年齢の少年が家に居るとは。眠たげな目が野暮ったさを強調している。

さて、なぜこんなうのうと描写できているかといえれば現在まだドアが完全に閉められていないからである。それというのも緑山が足でドアが完全に閉めさせまいとしているからである。なかなか強引な手段。それほどまでにこの贅波という少年に用があるのか。

「なあ」

「何か？」

「不法侵入って言葉、知っているか？」

「知ってますとも」

「……不法侵入って意味、知っているか？」

「無論です」緑山は快活に笑う。

「少年法の適応、十四歳からってのも？」

「馬鹿にしているんですか？」

「知っているならこんな真似しないよな、と」

この会話の間にも贅波はドアを閉めようとし、そして緑山は自分が入れるだけのスペースを開けようとしている。

「何を馬鹿なことをー」

「棒読みで言われてもな」

「友人の家に上がりこもうとしているだけじゃないですかー」

「友人なら友人を脅したりしない」贅波は緑山の鞆への力の入り具合を見て言う。

「はっはっはー。心配無用。それはあなたの妄想ですよー」

「友人だとしても男の家に一人で上がり込んだりしない」

「私の貞操の心配をしてくれるなんてー」

「俺の生活の心配をしているんだ」

「それは国と親が保障してくれるでしょうにい」

「・・・殴っていいか？」贅波は拳に力を込める。

「死にたいならー」それに金属音で緑山は応えた。手には三段口ツド。

「・・・・・・・・」

「入れやがれってんだよ鬱陶しいな。私の頼みは聞けないってのに・え・な・み、ひびきくーん」緑山は三段ロッドのボタンを押した。すると、バチツというショートするような音が鳴った。スタンガン内臓か。

「み・ど・り・や・まあやはさーん？」

「な・あ・にー？」

まるで子供のやり取りだ。しかしその中には謀略の数々が別れない。

「帰る気は？」

「ない」即答。

「せめてそれを収める気は？」緑山の三段ロッドを指差して贅波は言う。

「貞操保守のため無理です」

「せめて……」

「せめて？」再びショート音。

「もういい……」贅波は緑山の三段ロッドを見て言う。

そしてドアから手を離し、緑山を迎え入れる。

「さすがだね、贅波くん」

「暴力に屈する自分が情けない気もする」

「いやいや、非暴力は素晴らしいよ？」

「そこに不服従も加えたい」贅波は奥の部屋へと入り、パソコンの前の椅子に座る。少し、椅子が軋んだ。

「諦めなさい。器じゃないんだから」堂々と無造作に置いてある座布団に緑山は座る。

「そうはつきり言うか」

「言いますとも」

「……で？」

「うん？」

「何かあったんだらう？」

「そんなことはないよ。引きこもりなあなたを外へと連れ出そうと」

「わざわざ学校をサボタージュしたわけでもないよな？」

「ま、ね」緑山は軽く肩を竦める。「サボタージュじゃないわけだけれど。教師公認の休日だ」

「それじゃ。俺の安全な生活のためにもさっさと話してくれ」両手を絡ませ、贅波は不敵に笑った。

### 安楽3

「もう少し触れ合いを楽しもうよ」緑山は髪をいじり回している。

「脅迫した人間の言うことか」

「もう少し外出しようよ」

「大きなお世話だ」

「ふん」

「はん……。さっさと話せ」

「かの有名な密室事件」

「……。」「贄波はジト目で緑山を見た。それに緑山は少しじろぐ。

それはそうだが、密室の事件だけではわけがわからない。まるで言葉が足りないのだ。

「間違えた、密室「殺人」事件」そう緑山は付け加えた。

「……。状況は？」

「あーつとねえ……。今思い出す」そう言うところめかみを緑山は突き始めた。脳の活性化をはかっているのか。

「あ、うん。思い出した」そして数秒した後はじけるように顔を上げて言った。「応接室、知っているよね？」

「それくらいは」

「そこと職員室とがつながっているドアに遺体もたれかかっていたわけです。ドアには鍵がかかっていなかったけれどそれだって遺体が鍵の、ないしつかえ棒の役割をしていたというわけ。」

「……。」「

「窓の鍵はしまっていて当然校長室とつながっているドアは鍵がかけられていた。いずれも壊された形跡はなし。よって、密室。ああ、ちなみに発見者の学生は完全にアリバイが」

「……。言っておくが」

「何？」

「俺をダシに内申点を密かに上げていることはとつくに、知れているから」

「な、なんの話・・・？」あからさまに挙動不審に緑山はなった。「おおよそいつも勢いで『私が解きましよう』云々抜かしたんだろう・・・」言い終えると贅波は大きくため息をついた。

「り、利用できるものは利用しないと！」

実はこの緑山、学校がいわゆる秘密主義、秘匿主義で警察に非協力であるので身内であるポジションを利用し解決を何度も買っている。

無論表向き、学校は警察に協力するがそれだつて聞かれれば応える、というもの。未成年の取調べの難しさの一面だ。

「さつきまで友人と呼んでいた人物を『利用』？」

「言葉の綾です」高慢たる態度、正確に言えばぶんぞり返って応える緑山が居た。

「それと。学校も堂々と早退できたと・・・」

「はっはーん。厳密には早退『まがい』」何が誇らしいのか緑山は胸をはった。

「はん。どうでもいい・・・ま、良いか。関係ない話だ」

「そうそう。格好良いよ？ 安楽椅子探偵つてのは。陰で私を助けてる。忍びだね、よっ、かっくいー！」ついで緑山は口笛を吹くまねをする。無論まねで、笛ではなく実際にヒューヒュー、などと言っている。

「ふうん・・・」そんなことにかまわず贅波は天井を見上げて目を瞑った。何かを考えている風だ。

「・・・ささ、いつもみたくパパッと」緑山の言うパパッととは物を放り投げることらしい、ちかくにあつた黒の小さいクッションを放り投げた。

「まるで情報が足りない」

「ん？」

「とりあえず今日は帰ってくれ。夕方には人が来る」

「・・・だれが？」緑山は興味を示すと贅波は顔を引きつらせて緑山から視線をはずす。

しかし素早く緑山は移動し贅波の視界に入る。

「誰でもいいだろ」

「あ、女関係？」

「露骨というか、あからさまというか・・・」

「じゃ、なに。』おほほほ、贅波さま。よもやコレですか？』と小指でも突き立ててろっての？」

「や、もういい。ほら、帰れ」贅波は手を追い払うように動かして緑山を追い出そうとする。

しかしそれは逆効果であった。

「こんな引きこもり児にだれが会いにきて、そしてあんたが会おうとするような人。興味が尽きませんな」

「尽きなくて良いから。帰れ」再度贅波は追い払う仕草をする。

「あっはっは。今を何時だと思っておられる？」どうやらこの緑山、時代劇にいささか入れ込んでいるようだ。まるでその悪役のような笑みを浮かべたのだった。

「・・・二時」パソコンの時計を確認し、贅波はこたえた。

「はっはっは。夕方には程遠い。だというのに贅波殿は私めに帰れと？」

この緑山の様子にいささか贅波はあきれていた。あいかわらずだ、と。

「居座りそうだったから。図々しく人のことに首をつっこみたくなる緑山サンなら」嘆息気味に、贅波は言った。

「おせっかいと、言ってほしいね」

「確かに今の世の中おせっかいというのは人のことを気にかける良い人のおおよそさすが！」

「さすが緑山さん？」

「さすが違いだ！」

「ちゃんと漢字変換しないとわかりにくいよ」

「こういうネタは嫌われるんだぞ!？」

「ああ、贅波が出ている時点でだめだから」

「なんだその俺がまるで『全然面白くないまるでギャグから程遠い男』みたいなの!？」

「それは少し違う。ボケもつつこみもろくに出来ない贅波くんだけれど」

「だけれど?」

「いじられるだけなら!」

「痛いだけだ!」

「あつはつは。諦める引きこもり」

「帰れよう!」

「ニング娘?」緑山は贅波の途中からの言葉につけたして言った。

「古い! あんな地球の問題解決に貢献するふりして宣伝しようとしている連中!」

「ほつほう。そんな見解はまさしくひねくれてらっしやる、贅波ハン」

「京都言葉は弁えろ」

「あれって芸者言葉らしいね、もともと。だから敬称づけも変わっているし敬語みたく聞こえるんだ」

「妙な補足をどうも・・・」いい加減贅波は疲労した様子だ。精神的に。

それにしてもあまりに暴走していたのではないかと、思う。

「今日はメールで質問事項送っておく。明後日には結論を出しておくから」

「から?」

「帰れ」

「帰りませんとも」

その様子に一度大きく息を吸い込んだ後、滔々と贅波は思っまま言葉を発する。

「人のプライバシーを侵害するな。俺に踏み込むな。そういう

のは友達恋人関連でやってくれ。もう一度言う、俺に踏み込むな。俺はあんたの持ってきた事件を解決してあんたの内申点の向上に協力する。何の不都合がある？ 望みすぎるな。踏み込むな。内申点の向上を妨げたいか？ 距離をわきまえろ。そもそも始まりが偶然で、しかも俺に関わってきたのはあんたの都合だ。どれもこれも、あんたの都合のものばかり。俺にメリツトなどなかった。俺は事件を解いて優越感にひたるわけでも金をもらうわけでもないんだ。いつでもあんたとの関係を切ることができる。それに「そこで数拍贄波は言葉を区切った。そしてまっすぐ、緑山を見据える。

「あんた、自分の生活を他人にとやかく言われたいか」

「へん・・・」緑山はふてたように口をとがらせるが、それ以上とくに何も言わず、出て行った。

その様子を何を言うでもなくじっと贄波は見届け、そしてパソコンにむかって何かもうれつに打ち込み始めた。その様子たるや、鬼人のようだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5963b/>

---

灰色探偵

2010年10月10日14時01分発行